

霧氷の花

囚われの女たち

第一部

山 代 巴



囚われの女たち 第一部

霧氷の花

一九八〇年十一月三十日第一刷発行
一九八一年一月二十日第三刷発行

定価一五〇〇円

著者 © 山代巴

発行者 原田奈翁雄

発行所 株式会社 径（こみち）書房

東京都千代田区三崎町二一―三―五 影山ビル

電話 ○三―二三四―四六〇八

振替口座 東京一―三二七二六

印刷 明和印刷株式会社
製本 株式会社 積信堂

囚われの女たち
第一部
霧氷の花

山代巴

カバ―絵
装釘
山口 泉
山代 草子

目次

序の章 路のとう

*

屏禁房の主イッチヨメ

女衞の玉

風の抱擁

冬を越す歌

多様な念仏

女護が島と兜虫

あとがき

342

301

257

192

140

119

43

5

囚われの女たち

序の章

落のとう

一 子守歌

このごろ私の思い出す子守歌は、
「落^{ふき}のとうはおになる……」

という子守歌です。これは中国山脈から流れ出して、日本海へ注ぐ江^{ごう}の川のほとりで歌われたという子守歌で、その歌い手の世にも稀な美しい声と、まるで谷川のむせぶようなふしまわしとは、私の苦しい時を救い、今日を育ててくれましたから、それで私は寒い時悲しい時はいつも、この子守歌を思い出して、自分を励ますようになりました。

実は一九四二年の夏、私は東京地方裁判所の法廷に立ちました。その時検事さんは、「お前のやってきたことは別に法律にふれる証拠はないが、これを立体的に見ると明らかに治安

維持法違反幫助ほうじよである」

と言われました。

「ホウジョとはどういうことですか」

とおたずねしましたら、検事さんは、

「たとえば、今甲という人が、自動車にひかれて死んだとする。甲に日ごろから敵意を感じていた乙という人が、ちょうどその時そこに居あわせて、助けようとしなかったとする。その場合、乙が知らなかったんだといっても、本官はこれを立体的に見て、乙は見えて見ぬふりをして、死ぬのを助けたんだと断定し、これを殺人幫助と見なす。これと同じ道理だ。お前は自分の周囲で、日本共産党の目的遂行のためにする行為が続けられているのに、それを一度もとめたことがないではないか」

と言われ、結局懲役四年、通算三〇〇日（被告として拘禁した日の中から三〇〇日だけを体刑と見なして、四年の刑の中から差引いてやるという意味）を申し渡されました。

（私はその時心の中でつぶやきました）

「お父さん、お母さん。そして愛する夫……。私はどうすればよいのでしょうか」

「私達が警察へつれて行かれる前の日に、御両親へお送りした小包みには、御二人に喜んでいただくようにと、名物のツクダ煮がはいっていたでしょう。そして手紙には、私達夫婦が、いつも御両親の幸せを祈っていることが書いてあったでしょう」

「私は、家を出てから今日まで十三年あまり、いつも故郷の家を思わない日はありませんでした。

あの家のために、私の娘時代がどんなにギセイ多いものであったかは、御両親が一番よく御存知です。私にとって、お母さんを泣かすということくらいいいことはありません。お母さんを泣かさずにすむのなら、私はどんなつらいことでも辛抱できます」

「だのに私達の事件というのは、御両親をどんなに苦しめたことでしょう。それを思うと、私はつらいのです」

それなのに、いつかの手紙にお父さんは、

「私ら夫婦は別に悪い事をした覚えはないが、お前たちに今日この苦勞をかけるのは、私らへの何かのむくいかとも思う。代れるものなら代ってもやりたい。お前らの幸せのためになら、今日思い切ってみずから命を絶とうかとも話した日もあるが、この生まれ難い人間に生まれさせていだいた大恩に感じては、死ぬこともできぬ。

汝よ、理窟の靴は馬もはかぬ。カンシャクの杓しやくでは水がくめぬと、昔からことわざもある。馬もはかぬとは、馬鹿も用いぬということだ。理窟では世の中は渡れぬものじゃ。馬鹿になれ、馬鹿になれ。馬鹿は尊いということを、ただの一分でも考えてくれ。

いにしえの聖賢も馬鹿になりたいと言うておられる。父は七十の年になる今日まで、尊い馬鹿になれなかったのが残念だ。汝は尊い馬鹿になろうと、ただの一分でも考えてくれ。それが父への孝養だ」

と書いてくださった。お母さんは、

「あの日以来、腹にカタマリができたようだ。庭にはボタンが咲いている。ひらいたのが三つ、

つぼみは数えきれない。イチハツも一列に咲いている。美しいことだけれど母は笑えない」と書いて送ってくださった。御両親様ほんとうにありがとう。

「夫よ、私は妻らしいことが何一つできないのが残念です。けれど私は、あなたを心から敬愛しています。だからあなたの進む道をけがしたくありません。あなたの人格をきずつてたくありません。私がいいたいのはそれだけです」「御両親様よ、愛する夫よ、私にはこれ以上どうする力もありません」「法廷よ、さようなら。私にとって、ここは何もうとこではありませんでした」

かくして裁判は終わりました。

いよいよ自由を失って、三次^{みよし}刑務所へ送られる汽車の中で、なつかしい故郷の山川を見れば、ああ、あの川のほとりの、大きな棕^{つばき}の木よ、十六歳の昔あの下に立って、私は絵をかけた日もあります。あの白い往還^{わんわん}ばたに咲いているのはサルスベリ、甘く悲しい赤い色。鉄道べりの畑には小菜が伸びていて、母に似た人が小菜をまぶいていました。岩にくだけて白く泡立ちつつ流れる川、底知れず青く澄んだ淵、そこらはみな私の心のふるさとなのです。秋の太陽はキラキラ輝いて、空気は澄み切っていて、じっと見れば涙をさそうものばかりでした。

十日市駅に下車して、三人の看守に守られて町を歩く時、そこにある顔々は何と軽蔑をたたえて見たことでしょう。三十分も歩いたろうか、あの道はずいぶん長く、やっと向うに高い塀の囲いがあらわれて、その高塀につくまでの道端には、白いサルスベリの花の満開した木が一本立っていました。夕陽は白い花にはえて、そこらへんには赤とんぼが群がり飛んでいました。

これが社会とお別れの最後の風景でした。

三次という所は、日本海へ流れる江の川が馬洗川、西城川、えの川等三つの川と落ち合う盆地です。そういう川の関係から、年中霧が深く、霧の海というのがこの盆地の名物でありました。そこにある刑務所は明治中期の建物で、がん丈に造られている木の格子戸は、丁髷に刀を持った役人の背景でなければ似合わないかっこうで、その中へ八十名あまりの女囚を収容しておりました。

私にあてがわれた房は、拘留館という建物にありました。拘留館というのは、被告の収容所にあてて建てた建物らしく、一般収容者と隔離するためか、周囲には高い白壁の塀がめぐらされ、そのまん中に建物が一つあって、それには四畳半の房が二つだけありました。

当時この建物へは思想犯と呼ばれる者か、特別何かの差しかえある者だけを置く習わしでありました。

独居担当看守は、拘留館と独居房と屏禁房（乱暴な囚人を鎮まらせるために特別の装備をした房）とを受持っているというものでしたが、この三つの建物は看守詰所、第一工場、第一舎房等、この刑務所での大きな建物を中心にして、離れ離れに建てられた小さな建物ですから、担当看守が見まわって来て、また再び見まわりに来るまでには、かなり時間がかかります。その間、人間の息はこの囲いの中には、一筋か二筋あるだけです。

そういう関係からか、この刑務所のどこにある寒暖計より、拘留館の寒暖計が、いつも一番下を示しているという話でした。そういう拘留館の寒暖計は、ある日とうとう零下十二度を示しま

した。その日、冷水摩擦の手拭はかたまつて、それで体をこすつても、その手拭は体を離れると、棒のようにキンと立っておりました。

そんな寒い日の朝、音もなく格子戸の中へ流れこんでくる白いものがあります。それは霧氷むひようというものだそうで、それが木に流れつくと、さっそく樹氷という美しい花の結晶になつてゆきます。だから、霧氷の流れる朝は、みるみるうちに、木には氷の花が咲くのです。樹氷の花の咲くような日は、きつと天気の良い日で、十一時過ぎごろになると花はたちまち消えて、房の南に見える高谷山は晴れ渡り、その上には、冬の真昼の太陽があらわれてまいります。

その時、全身の神経は眠つて行きでもするのか、歯痛も一時おさまるようなひと時があります。こんなふしぎな酔いのまわつた口に噛みしめた、三次刑務所のヒラギリ菜の浅漬の香りは、今でも忘れられないほど食欲をそそるものでした。このひとときの酔いが、あの冬一度もなかったとしたら、寒がりやで弱虫で、歯全体がぐらついていた当時の私はきつとあそこで泣いたろうと思うこともあります。

それほど、樹氷の花の溶けて行く暖かさは、私の体には薬でした。あの暖かさを薬だとも思い、一刻千金のようににも思い出せるほど、あのころは私にとって冷たく、苦しい時代でした。

「露のとうはおになる」

という子守歌は、あの時あそこで、美しい声で歌って聞かされたのです。

それはある日のことでした。隣りの房へ一人の受刑囚が入ってまいりました。

その人に与えられた仕事は、私と同じようにキョウギという木の皮で、三つ組を編むことでした。この仕事は、老人や子供が赤ん坊をおぶって、子守歌でも歌いながらできるような単純な手先仕事です。

お互いが自由の身なら、壁一つへだてて同じ単純な仕事をしている女どうしですから、「もしもし、あなたは何をしてここへ来たの」

と、どちらかが話しかけても不自然ではないのに、最初の一日も、その次の日も、この人は音もないほど静かでした。

お互いに自由な声、自由な言葉を取り上げられている女どうしとはいえ、担当看守の居らない時くらい、ちよつと言葉を交わしても不思議はないのに、この人はそれをしないのです。点検の時「七二番」と言うその人の声からおして、その人は五十歳近い人のようです。

三日目のことでした。その日は特に寒い日で、姿のない人間が歩いてでもいるような音をさせる雪風は、いつも廊下のあたりをあちこちとさまよっておりました。

外にはお塩のような雪が、シンシンシンシン降っていて、鳥の姿も見えません。

「交代します」

「独居四名、屏禁二名、拘留館二名、異状ありません」

と言いかわす看守達の声がして、二人の看守の足音が遠のいてからは、深い山の中のような静けさが、ぞーとせまって来るようでした。寒い、坐ったまま体が氷になるような寒さのせいかな、自然、体をゆすぶりながら仕事をしている自分に気がつきません。

その日の午後二時ごろでもありましたろうか、こういう静けさの中に、初めて人間の声とも思われないほど細い声が、一筋流れてまいりました。じっと注意して聞いていますと、それは一つの調子を持っている声です。フリコのように体をゆすぶりながら仕事をしている、私の運動にあわせたような調子です。

何を歌っているのだろうかと思つて、私は耳に全神経を集めるようにしましたが、ついにその日はわかりませんでした。

次の日も雪でした。雪も、雪風も昨日と変わりありませんでした。

担当看守の足音が雪の中へ消えて行つたあとの静けさも、昨日と同じです。

やがて流れ出した一筋の声は、だんだん言葉のわかる歌に聞えてまいりました。

歌は流行歌でも何でもなくて、よく子供らが、心にあることを何でもありあわせの節をつけてうたっているような歌でした。

その節もある所は、「熱海の海岸散歩する、貫一お宮の二人づれ」の歌に似ていたり、またある所は、子供の時に聞いた、「ネンネンヤーネンネンヤー、ネーたら餅を搗いてやる、起きたらヤイトーすえてやる」という子守歌の節にも似ています。

歌の文句のところどころは、今日もはっきり覚えていますが、聞き手が覚えてしまうほど、その歌はそれからの毎日毎日、看守がいない間じゅう、くりかえしくりかえし歌われました。

今でも覚えている一節は、

落のとうは十歳とおになる

子守は七つの親なし子

ネンネは大きな大息子

大事な大事なあととりご

ネンネンコーロリ、ネンコロリ

寝る子は育つよ寝ておくれ

ネンネーの炬燵こたつもしてあるぞー

露のとうは雪の夜

嫁よめごに行く日の夢を見た

春になったらチンチロリ

花のカンザシさしていた

チンチンチーロリ、チンチロリ

誰より先のお嫁入り、

日傘もくるくるまわします

というのです。心にあることを何でもかまわず節をつけて、鼻歌にして歌うこの歌を、よく聞いてみると、それは一つの物語りを教えてくれるのです。

二 機織り

その物語りというのは――

江の川、上流の山の中に、貧しい百姓のお母さんと娘が住んでおりました。

お母さんは一人で百姓をしておりましたが、いつのころからか胃病にかかり、だんだんひどくなって、娘が七つの春、まだ椿の花も咲かないうちに死にました。

娘は物心つく時何より先に、胃病には露のとうがよい薬だということ覚えしました。

ちいさい時から露のとうを探し歩いて、大きくなりました。ソーズ（この地方では水車のことをソーズと呼んでいます）の水落ちのツララのかげに露のとうがありました。取ろうと思って手を伸ばして行くうちに、水車と石垣の間へ落ちて死ぬ目に逢ったこともありました。

崖の上の露のとうを取ろうと思って、崖によじ登っていたら、雪なだれにたたき落されたこともありました。

娘はお母さんが大好きだったから、寒いともつめたいとも思わずに、お母さんを大切にいたわってきたのに、お母さんはどうとう死んでしまいました。親類の者が集って、七つの娘は子守奉公に出すことにきめました。

家も屋敷も、藪も、田も、みんな人手に渡りました。もう住むことのできなくなった親子の家の背戸には藪があつて、七つの娘がこの家を出る時には、藪の中へ紅椿の花がいっぱい落ちていました。そこらには露のとうも大きく伸びて、カンザシのような頭をのばしておりました。

おばさんにつれられて奉公に來た家は、近郷に知られた旧家で、白壁の塀にかこまれていました。お守りをするようになった坊ちゃんは、大事な総領息子さんでした。